一泉

発行所
〒921 金沢市泉野出町
3丁目10－10
金沢泉丘高等学校内
一泉同窓会
電話(0762)42－0211
定価　1部　100円
橋本清文堂

「厳霜碑」

学校の門に一歩、足を踏み入れると、真先に目に映ずるのが厳霜碑と初代校長、三代校長の富田輝象、久田督先生の銅像である。

この碑は明治四十年に建設され、旧本多町の一中校舎の姿をその儘に伝え七十数年を経た今日、今も尚現泉丘高校に受け継がれている。

時代の変遷にともなって、この厳霜碑の由来について今一度この歴史をたどってみることも意義のあることと思い、古い記録によって茲に再録してみたい。

『明治以降の日本の歴史は戦争一色に塗りつぶされていたといってもよい。明治の一中の過ごした歳月のなかでも、日清、日露の二度にわたる戦争が起こされ、国力を挙げての戦いは静かなるべき学園にも深い傷痕を与えた。

一中生の周辺にも数多くの戦没者を出し、とくに日露戦争では三三名の卒業生が異国の土となった。明治三九年二月、日露戦争で倒れた卒業生を顕彰する為、校庭に慰霊碑を建設しようとする企てが具体化され、職員、生徒、卒業生その他有志から総額二、二六六円余の寄附が集められて同四一年一〇月一五日慰霊碑は完成し、秋雨けむる碑前にて建碑式慰霊祭が行われた。碑石は高さ一丈五尺五寸、幅五尺五寸、厚さ一尺の仙台石、碑文の起草者は久田校長ととくに親交のあった三宅雪嶺、筆者は旧職員藤井鏡であり、篆額には旧藩主の子孫である前田利為の筆で、「厳霜烈日可畏而仰」と記されてある。篆額の文字は中国の正史「新唐書」のうち宋祁の筆になる顔真卿列伝の

嗚呼雖=於五百歳」　其英烈言言
如=厳霜烈日」　可=畏而仰」哉

からとっている。また碑文は三宅雪嶺らしい国粋主義の立場から、戦没者の功績を讃え「彼の戦病死者は茲に人事に関する永遠の教訓を垂る」と結んで、単に戦没者の慰霊のためだけでなく、国家に対する不惜身命の覚悟を一層強靱なものに鍛えあげる目的を有することを明示している

こうして厳霜碑は、当時の一中の教育精神を象徴するものとされ、天皇の御真影と共に今次大戦の終結まで、朝夕に校門を出入する生徒の敬礼を受け続けたものである』

なお、この厳霜碑の建設は卒業生の協力に依ることが極めて大きく、建碑の過程にて卒業生の組織の必要性が強く認識され、このとき初めて一中同窓会の結成が行われた。

その後、この碑は終戦後の学制改革と敗戦による進駐軍の指令に一時徹去を余儀なくされたものを昭和二八年四月、全会員の熱望と関係当局のご理解によって再建され、厳霜の英霊と共に物故恩師及び物故会員総ての霊を新たに合祀することになったものである。

厳霜碑は全物故同窓会員の慰霊の碑として、今後の泉丘校の校運の隆昌と桜章健児の徴として永くここに残ることであろう。

「一泉」第四号によせて

泉丘校蔵書解題目録の編集を終えて（一）

尋常中学校長
於文部省撮影写真一葉
山森青硯
（一中三十三回卒）

はじめに

編集子のお需により又拙文をつらねることにした。何辺恥をかいても懲性のつかぬ者は又恥をかく。筆者は其代表の様な者だ。

解らずとは言わず、何か私見を述べては、江湖の御叱責を乞う。又は御教示を乞う。と云って其責を逃れる弊がある。如何様に誉めても、如何様にけなしても、泉丘校に山積する稀観書は、宛も東海に屹立する富嶽の如く微動だにしない。其解明は九牛の一毛にも達していない。今稿を終えて感ずることは、筆者の慙愧の一言に尽きるのである。

世の中は皆そうかもしらぬが、鉛槧が完するのを待って、次々と資料が出てくる。是を補遺とか、拾遺とか云って某書に所載する。筆者も前例に漏れず誤謬だらけで終った。

按うに、昭和五三年四月十八日畏友鏑木悠紀夫教諭よりお誘いをうけて「泉丘校蔵善本解題目録」編集に参じてより、荏苒三ヶ年を閲した。何もかも時の流れに押流されて忘却の一路をたどって、元の筆者に戻っているが、忘れ得ぬものは、善本に先師の書込があり、先哲の手沢を生で嗅ぎ得た喜びであった。

前田斉泰、三宅真軒、西田幾多郎久田督、藤井準夫等枚挙に暇がない。特に米庵流の隷書、かき題簽に接する時は、何もせず表紙書込を凝視して過したことは一再ではなかった。再び初稿に立ちかえり筆者心底に映じたものを再録してみよう。

○尋常中学校長於文部省撮影写真一葉

此の写真の撮影年月未載であるが、所載人物、野田藤馬、嘉納治五郎との職歴とを考察すると略々明治三〇年頃でなかろうか。一県一中学校設置の学制改革草創期、即ち明治一九年（一八八六）中学校令を発布。中学校は、修業年限二年の高等中学校と、五年の尋常中学校に分けられ、高等中学校は全国五学区にそれぞれ一校あて、尋常中学校は各府県に一校あて設置することになった。

右尋常中学校長ばかりの写真である。掲載人物は幕末延長の人物ばかりである。裏面には学校名と職柄が併記してある。主なものを抄記すれば、文部次官柏田盛文、文部大臣尾崎行雄、高等学校局長高田早苗、普通学務局長嘉納治五郎、文部秘書官正木直彦、山梨県尋常中学校長幣原坦等である。

特に其革新色が濃く、尾崎行雄氏は保安条令違反追放後の文部大臣就任間もなき頃であった。漸く封建時代を去り、欧化時代に突入、諸事英化せんとする人事が面白い。筆者管見の人物中英学者のみを拾ってみよう。

幣原坦（山梨県尋常中学校長）

慶安三年（一六五〇）和蘭砲手ユリアン（Julian）武蔵国に於いて大砲の試射を行ったことがあった。氏は文学博士、此時の砲身拓本を愛玩（三檣船の鋳文、其下に「和蘭東印度商会一六〇九」の欧文字が所載）する等、好んで欧文資料の宣伝につとめた。

江原素六（私立麻布尋常中学校長）

天保一三年（一八四二）の江戸生れ、明治三年（一八七〇）徴士として米国に留学、約一年留り、帰朝、第二兵学校として沼津中学校を起して其校長となった。彼は盛んに英学を奨励したのは、同校英語教師米人ミーチャム（George Marsden Medcham）の感化を受けたからであった。ミ氏はカナダ・メソヂスト派の有名な宣教師であったので江原は竟にキリスト教徒となった。明治九年（一八七六）宣教師イービ（C.S.Eby）は江原に招かれて沼津中学校に英語教師として奉職、江原は我邦英学普及第一人者であった。

井深梶之助（私立明治学院長）

井深は本多庸一（私立青山学院）と共に、英語学校出身者である。同校は文久二年（一八六二）幕府、横浜運上所前（今の本町五丁目）にあり、石橋政方、太田源三郎、米人ブラウン等は皆教授、奉行所所属の子弟に英語を教える専門校であった。

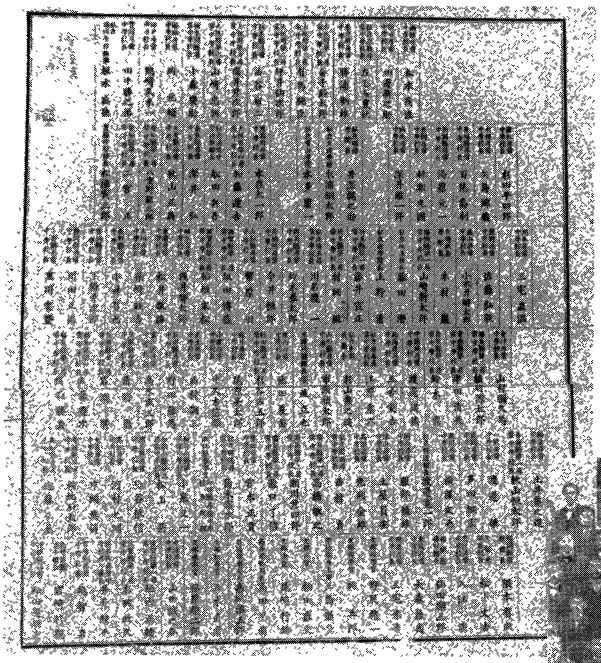
井深は我邦聖書和訳に特筆大書の人物である。即ち明治五年（一八七二）米国聖書協会は「新約聖書」和訳を企図し、外人委員にヘボン、ブラウン、グリーンの三博士を選び、我邦委員として井深梶之助、奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎を選んだ。明治一四年（一八八一）「新約聖書」全訳完成は彼の功が大きかった。現職明治学校長は学成り業遂げて後の就職であり、黎明日本開眼の中心人物であった。

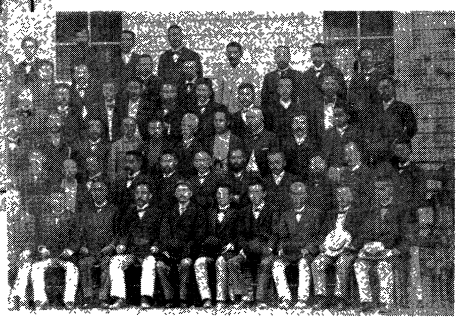
西村　貞（私立関西尋常中学校長）

西村氏は周知の学者「日本初期洋画の研究」「日本銅版志」の名著がある。

以上の尋常中学校長だけを見ても当時の明治政府は、如何に先進西欧諸

国に追つかんとする様、熾烈であったかを一瞥する事が出来よう。色褪せた写真一葉であるが、貴重な資料と云わねばならぬ。我郷土との連りは、野田藤馬（石川県尋常中学校長）高木亥三郎（富山県尋常中学校長）横地石太郎（愛媛県尋常中学校長）である。高木氏は後程前田家家扶として仕え、横地氏は山口高等商業学校長、前田利嗣学友として奉職した。柏田盛文（文部次官）は薩摩人、明治二〇年（一八八七）百万石城下の一大覚醒を促さんとして、第四高等中学校初代校長として来沢、却って金沢の先進に驚いた（同校第一回卒木村栄ほか三名）のみならず、本葉掲載人物で終生脳裏に金沢を去り得なかった人は嘉納治五郎と正木直彦の二氏であった。（つづく）





今春のひととき

三須　武男（一中二〇回卒）

今、金沢一中時代（大正二年卒業）の東京在住者は六人になってしまった様です。それもその半数は単独で外出が出来ない有様です。それで歩ける者共が話合って、歩けない方々を都合のつく限り訪れようではないかという話で、先ず都合のつく谷恵吉郎君（無電の大家、工学博士、元海軍造兵中将、東京電機大学教授）と小生が、飯本信之君（日本に於ける地政学の創唱者、理学博士、前御茶ノ水大学教授、駒沢大学教授）の東中野の宅を訪れることになった。時は今年五月五日の節句、恰も此の日は快晴の上天気で何よりでした。

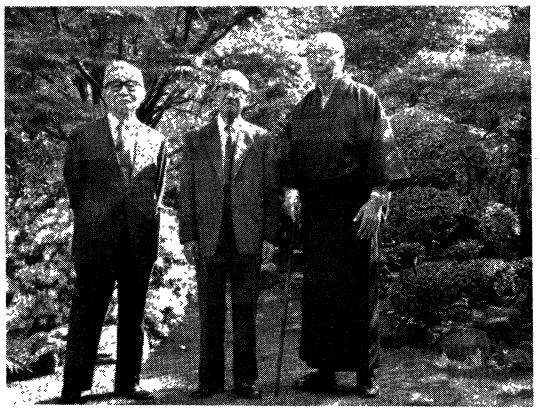
久方振に飯本君が集めた同窓の数々の写真を回覧したり、同邸内新緑の見事な庭を眺め、談笑出来たことは、近来にない好機でした。

尚、当時同君令息のお嫁さんが、三人揃った写真を撮られたのがあります。

後日次の一句をもらしたことを書添えます。

〃友共に友の庭愛で五月晴〃

思い出せば、山歩きがやみつきの小生は、東大法学部を卒業するなり、当時農商務省山林局長である同郷の先輩、鶴見左吉雄氏によって同省に就職出来、それから、北は北海道から南は九州、沖縄の山々を歩くことが出来ましたが、今、北海道では図らずも摩周湖畔にて、飯本君夫妻に御会いしたことなど想い出になります。又、谷君とは学生時代に白山々頂を極めたことを今更の如く想出になっています。



同窓の随想

大阪釜ヶ崎 愛隣病院長の二代

中堂観恵（一中二十一回卒）

わたしたちの属した大正三年卒業のクラスは、妙に俳句と縁が深かった。在学中すでに一家をなしたものもあったし、また、後に世間に出て大をなしたものもある。わたしがここに推称する本田一杉君もこの一人である。

本田君は名簿にあるいは林喜良となっているかも知れぬが、中学時代はそれが本名でニックネームは林のアンマであった。生れは小松市の附近であったらしいが、彦三町にあった林という建設業者にもらわれて、そこから一中に通い、許嫁もあったらしくみなからひやかされていたものである。

一中を出ると金沢医学専門学校に入り医者の資格を得たが、そのころ養家の林家と縁がきれ許嫁との縁もきれたらしく、その有為転変は一篇の小説のように当人本田君の手によって書かれている。

そこで大阪に出て、つてを求めて大阪商船の船医となった。これが大阪と縁のつながる発端である。船医をつとめること数年、そこで資金を貯え開業したのが大阪の貧民窟。苦労を重ねた人生経験から、たちまち附近一帯の人たちの味方となり、本田先生の名は新聞にも大きく報ぜられるようになった。

昭和七年、わたしは海軍大学を卒え海軍々令部参謀として東京にいたが、たまたま大阪附近で陸海軍の連合演習をすることになり、その打ち合せの為に大阪にゆき、かねてから聞いていた本田一杉君の名を思い出し訪ねてみようと思い、まだタクシーなどのない時代だから、国鉄の駅前で人力俥をひろい新聞で見た住所に走らせた。ところがお宅まで仲々の距離、俥夫に住所はわかっているのかと聞くと、先生の名はこのあたりでは神様のようなものですといい軍服姿のわたしを意気揚々と案内してくれた。

これから本田君親子と五〇年のつきあいがはじまるわけだが、本田君は船医時代から俳句に凝り、俳人一茶の風格をしたってみずから一杉と号し、ついでこれを本名とした。後に令息の本名にも良寛をとり今日にいたっている。そして主宰した俳人雑誌「鴫野（しぎの）」は関西一円を風靡し、あたかも関東におけるホトトギスの如くであった。

この「鴫野」は本田君の住所鴫野からとったもので、附近に釜ヶ崎という浮浪者の集る区域もあり、治安が悪くて警察も手を焼いていたところ、彼はここに腰を据えて、健康面から彼等を懐柔していったのである。国鉄の高架線の下を借り、ここに一切の施設をつくり集ってくる患者の面倒を見ていたのである。こうして釜ヶ崎二万の浮浪者は彼になつき、彼を恐れ、警察署長をして感謝させていた。

戦争という大あらしが通り過ぎたあと、本田一杉君は病気のために他界、わたしは無位無官の素浪人となっていたが、令息良寛君は成人して家業をつぎ、しかもその血液までも受けついで弱者の味方となり、集ってくる人たちの手をかりて荒廃したもとの施設の復旧につとめ、テレビも時折はこれを報道していたので、折々に手紙でこれを激励していた。

あるとき、音信があって発表した書籍の出版記念会をやるから来てくれという。東京からかけつけて会場の城東公会堂へ入ると、立錐の余地もないほどの人気、司会者が早速わたしを指名したので演壇に立った。ところが、本田令息とは戦後初対面であったので、この壇上をかりて初対面の握手をしたいというと満場破れんばかりの喝采。

そこで、この事業を大成させようとするならば、東京に出てその道に陳情せよ、いつでも案内すると激励した。その後しばらくして本田良寛君が上京してきた。わたしは上司赤城宗徳先生にお願いし、ときの厚生大臣いまの鈴木善幸総理に紹介してもらい、つづいて各担当大臣にお目にかかって誠意を披瀝した。

そのあと、わたしが大阪に行き府庁、市役所に出頭して詳細を説明した。話の筋道が通っているものだから順調に進み、敷地として市電の車庫跡をもらい、堂々たる釜ヶ崎愛隣病院が三、四年にして出来上ったのである。

それからもう二十年、大阪市の治安に重大な影響がありといわれるこの大病院も、もうしっかりとその基盤を固めたやに見受けられる。

サムシングの流れ

野市他作（一中二十八回卒）

入学早々父から秘かに「水泳と竹道とやれ」と聞いた。犀川で五歳の時から段々自信がついていた。第一

学期が終ると金石で海水浴が三年迄続いた。往還を大石目標にもっくり飲み飲み通った。三年の海水浴最終日、十一時頃監督の安田先生（体操）から「昼食後学校の道場に行って呉れ。今電話が有ったから。行って呉れるね」「はい」と返事したが取不敢養皓堂に走った。高橋高太郎先生（師範）をはじめ先輩の顔が一斉に注がれた。「オー来たか。直ぐ練習する。道具をつけて呉れ」と三人の方々と軽く竹刀を合せた。「一服せい。」と汗をふいた。「明日から四高主催の北陸大会に出場する事に決った。最初は岐阜中学、頑張れよ。先頭だぞ」との事だった。当日は全部勝抜の十人の中七人を抜いた。

此の様に二人三人と抜いて対校仕合は終った。私の選手として飛び出したそもそもの初出場だった。其の頃は寒稽古が終ると各校で選手二三人を派出する交歓が行われた。

五年生の時早稲田大学全国中等学校大会に出場する事になった。園田秀夫君を主将に、向井太作君を副にそして自分と三人が高橋先生の引卒の下に先輩の案内で八時からの仕合に出場した。

私は先頭だったので道具付け放しで十一時迄試合し、昼食後大隈重信侯邸に招待されて有名な訓話を賜った。十二時より仕合再開され最決定に主将と二本一本で後退し向井君から園田君へと変り遂に優秀して戴いたのだった。

扨て翌年再び出場し柴田外与治君が終始優秀で進んだが相手の主将に伊辺盛文君と亙って私も残念ながら退いた。今更何をか語らんと申しますが六十年たった今、御参考にもと敢てペンを走らせた。面が上達してこそ小手が上達すると伝統ある竹技はその時サムシングの流れありと言う金言は宜だと思う。

合掌

一泉の春溶漾と日本海

振り出しに戻って

山本俊光（一中四十一回卒）

「耳順」。孔子さえ六十にして異論の者への充分の心くばりが出来たとか。私等同級生はかくしゃくもいるが、計を伝え聞くも屢々である。いまやあるべき人生の座標点は如何と思わざるを得ない。（心身共に熟年であるべきなのに。）

先ずは健康保持。老人検診カード到着。複雑な思いで知り合いの医師を訪ねた。尿、血圧測定し「上等です。心配ないね。」と。定年迄は高血圧で御厄介になったがその後は御無沙汰のあとの判定でした。健康あってこその第二の人生と思い、次を記す。

1早起き、洗顔のあと禿頭を慰撫する指圧の冷水摩擦、寝起きに腰のだるい時は一分間のぶら下がり懸垂、夜は十時過ぎの就寝、畳に煎餅布団、手製の木枕―木は熱の不良導体なので年中適温。**2**食餌は高圧釜の玄米食―分銅もついてるこの釜は硬・軟自在。これを始めて二年になる今は白米はまずくてよう食べぬ。玄米の殻は腹の腸壁のブラシしてくれるとかで今まで弱かった腹加減はすっかり回復。畑も耕しているので野菜には事欠かない。従って医者や薬局とは交際なし。**3**煙草は高血圧で止めてから八年にもなる。**4**頭の体操。朦碌防止とライフワークとして絵に親しむ。週一回ずつの油絵と俳画。

「彼岸過ぎての麦のこえ。」とかで進歩のあとはたどたどしいが、漸く気のついたことは目に見えるものより心に感ずるものをということである。拙くても最後迄策を折ることがなければ自分に納得出来るものが一作位はと思っている。

今は振り出し、利息をもらっている人生。熟年、その心をえりてもう一人の私と黙語をかわしながらせかず慌てず少しでも深い人生を過したいと思うものです。

○花ぐわし
　話もはずむ　菖蒲園
○子蛙の
　眠りさませり　葭刈りて
○聞えざる
　ざくろの風鈴　ゆれる窓
○夕潮を
　岩の小蟹の　さまざまに
○柚子浮かぶ
　老いの軽さを　湯にひたる

一泉桜美会
第九回美術展のお知らせ

今回は人間国宝、隅谷正峯氏を祝し開催します。

美術展は恒例の如く金沢市片町大和デパート八階ホールにて百拾名の会員全員が出品します。御高覧の程お願い致します。

又、期間中の十日午後五時より同じく大和グリルにて「人間国宝」隅谷正峯会員の祝賀会を盛大に行います。

来年は十周年記念展を盛大に開催致しますので、御声援を賜わるよう御願い致します。

斉藤記

事務局　金沢市南森本町ワ三十一―四

ソロモンの空を征く一中同窓

八木田　喜　良
（一中四十五回卒）

奇しくも執筆依頼を受けたのが八月十五日の終戦記念日。之も何かの縁と想い、私の海軍時代転々とする裡に出会った一中同窓の方々から、同じ本多が森の古校舎に学んだと言う事だけで、何等心置き無く話題も弾み、苦境になれば如何に心の支えとなり励まされたかと、ラバウル時代の一面を追懐しつつ、特に今は亡き同窓の方々の鎮魂の辞としたい。

昭和十八年五月私の所属陸攻隊は、木更津基地からラバウル西飛行場に進出し、同じ航空戦隊の吾々の掩護戦闘機隊の大野竹好氏（45期）は、同時に東飛行場に進出した。彼とは入校以来本多町の同志会も一緒で、最終学年は同じ組で机を並べ同時に海兵に入校、霞ヶ浦の飛行学生舎も同室、そして同じ戦隊と云う全くの奇縁であった。両基地は山の上下と可なり離れて居り、終に会う機会を得なかったのが今猶、心残りである。海軍同期の野村浩三氏（44期）は艦爆隊、前川末次氏（45期）は艦攻隊で相前後して進出して居り、お互に作戦に追われ一堂に会する機会も無く、それとなしの動勢を知る程度であった。我が隊には富田康次氏（40期）が主計長として頑張って居られ、万事心強く一人の兄貴が居る様な気持だった。随分気儘に迷惑を掛けたもので、モレスビー爆撃時無理言って造って戴いたいなり寿司の味は、今猶、忘れず恐縮の至り。

ラバウルの最高指揮官は大先輩の草鹿任一中将（13期）で、嘗て一中在校中陸奥艦長で来校され顔も知って居り、余暇を見て表敬に司令部を訪れた。「おゝ良く来られた」と気さくに迎えられ、次第に話が進展し何の弾みか海軍砲術学校長時代やられた軍医顔負けの性病予防対策の訓示を、関連余談と混え面白く拝聴し、聞きしに勝る草鹿長官の人柄に触れる事が出来た。六月上旬私が敵機に墜され洋上を漂流して居たその上空を、高々度にてガダル方向に追撃する攻撃隊を認めたが、その編隊に勇戦空しく未帰還となった前川氏が居たとは後日知った。六月三十日レンドバー島に侵攻してきた敵軍に対し、我が陸攻隊は雷撃強襲を敢行し、同期大野氏は我が隊の掩護に専念死力を尽し終に未帰還。私は漂流後休養中で此の攻撃には不参で、大野氏と越田喜佐久氏（45期）は戦闘機隊にてラバウル経由ヴィン基地に進出したが、基地上空要撃戦にて間もなく散華。艦爆隊の野村氏は勇戦戦果を上げて居り、「不思議と俺には弾丸の方で避けて行く。」と洩らして居たのが印象的であった。

東飛行場の偵察部隊に十河義郎氏（42期）が整備で健闘して居られ、飛行隊徹収後は草鹿長官等と同様、ラバウル籠城作戦に従軍、戦後帰還されたが、杉本通泰氏（46期）は十一月上旬ガダルカナル島を強行偵察し、有効な敵情報告後未帰還。彼にも会えなかったが、後日別府海軍病院長の父君に、状況を御報告出来たのはせめてものこと。

我々が進出前の十七年十月には、伊東忠男氏（41期）（吾々の霞ヶ浦時代の教官でもあった。）は、母艦から発進しルンガ沖にて既に未帰還となって居られた。

ソロモン各地で幾多の一中同窓が活躍して居られた事と思うが、海軍航空に関して私の知る範囲を、極めて断片的に述べました。

激動の時代を越えた風雪日記

内田　一
（一中四十六回卒）

昭和十四年、不気味な入道雲が軍国主義という抵抗する事のできない猛烈なエネルギーを持って、頭上に覆いかぶさろうとしたその日に、私達46期生は泉ヶ丘新校舎より、最初の一中卒業生として巣立ったのである。

満州事変・支那事変・大東亜戦争・敗戦・戦後の復興・高度成長時代・世界の産業戦争におけるリーダーシップの把握……今考えればどうする事もできないような大きな時代の激流に、私達同期生は精いっぱい生きて来たのである。

かえりみますと、幼年学校・士官学校・兵学校・経理学校・少年航空兵・学徒動員・予科練飛行隊員・予備学生・これらの身分のままで大東亜戦争の中に消えて行った同級生達の一人一人が、猛烈な印象をもって思い出されることができます。

それは今、大会社の社長として日本を支配しているような、七十才近い人にはある意味では通じない事ですし、戦後生まれた青年社員にも解

ってはもらえない、はっきりとした一分画をもってせまってくるシーンでもあります。

社用で、学会で海外に出かけて行く私達は同じ飛行機に乗りながら、眼のさめるような美しい海の色を見ながらも、その波間の中に激動の時代を生き抜く事ができなかった、戦争の淵の中に沈んで行った学友を思い浮かべる一方、同じ機内の中でハネムーンに旅立って行く若きカップルの眼に写る紺碧の海は、まったく本質的に違うことを最近特に感ずる昨今です。

この文を依頼された八月十五日は、あたかも敗戦の日であり「戦い終んで36年、よくぞ越えたよ戦友よ、白い夏雲青い空、波間に散った特攻機、ああ特攻機」と、ふと感傷めいた軍歌が耳の奥にかすめて行くようです。

最後に、この十月二三日、私達は男の記録として、卒業後のお互いの生きざまを書いた文集を約四〇〇ページにわたる一ツの単行本として発刊する事になりました。

46期一三六人全同期生の絶大な協力によって出来上がった事を、感謝を込めて一泉同窓生にご報告申し上げると共に、機会があればこの「風雪に耐えて流浪の旅を続けて来た私達の旅日記」を、ぜひとも読まれる機会を懇請して筆を置くものである。

早春の記

小川忠男
（一中四十九回卒）

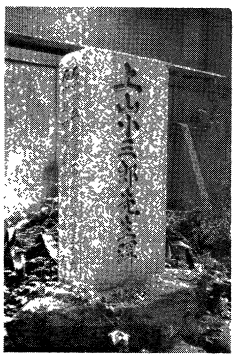
私は大正十三年四月末日金沢の片町（片町交叉点明治生命ビルの一角）小川屋呉服店の長男として生れました。家は代々呉服商で小川屋与兵衛を襲名して居り、私で六代目位になる訳です。私の父並びに弟、又祖父の弟筋（分家）である小川㈱の甚次郎氏三郎氏共々金沢商業卒業であり、当然の事乍ら尋常五年頃に父より金商へ行けと云われて居りました。

当時は上海事変、五・一五事件、引続き二・二六事件等で次第に軍国調の華かさを増して来た頃です。当然子供心にも「勲章つけて剣さげてお馬に乗ってハイドウドウ」で一にも二にも軍人になりたい思いで一杯です。

六年になった頃又々父は家業を継がす為に金商へ行け、いや軍人になるとの事で言合になり、結局石川県で一番の学校……と云う事で、やっと一中受験の許可が下りた訳ですが、そのかわりもし落第したらお前は京都の呉服屋へ小僧に行けとの事で、此れは又大変な事になったわいと思ってもの後のまつりです。大体男子たるもの女に頭を下げる商売なんて男にあるまじき仕事だと云う気持が頭にあるので、一中合格を知らされた時は実に嬉しく、やれやれ此れで女に頭をさげずにすんだわいと思ったものです。然し父の執念か先祖からの因縁か実に恐しいもので、矢張り今日現在女性に頭を下げねばならない商売をして行かねばならないとは、凡人の知る由もがなです。

二年生になった頃、音楽教育を英語の先生が掛け持ちでされる事になったのです。山本協一先生で蝶ネクタイの身形正しい方で、常にタイム・イズ・マネーで時間は正確、始業ベルの鳴らない前に教室に来られる方でアダナは山本のポンプ（消防ポンプ）非常に勉強熱心で音楽は世界の名曲が大好きです。当時レコード盤を四千枚も持って居られ、独身で私の妻はレコードですと云って居られました。当時「日米もし戦かわば」と云う本も出廻り、日本と米英関係が次第に険悪化し、そろそろ英語も敵国語式に云われつつある時代に、先生は一向に気にも止めず「一中生は世界の名曲を知る可きです。本当にすばらしい曲です。君達は成人し世の中へ出た時は、何日の日かきっと此処で習った音楽を耳にする事でしょう。その時は私を思い出して下ざい」と云われ、ゴールドセイブ、アワグレーシャスキングの英国国歌をはじめ米国国歌、オールド・ブラック・ジョー、菩提樹、ワーグナー作曲、スコットランド民謡等を一生懸命に教えて下さったものです。後日聞いた事ですが、その折配属将校の坂野少佐に先生は敵国国歌を教えたとかで叱られて居られたらしいのですが、そんな事はお構いなしで幾度となく教えて居られました。

それ以来四十数年たった此の頃、夜NHK・TV名曲アルバムにあの山本ポンプ先生が汗を流して教えて下さった世界の名曲が流れて来るではありませんか。先生は故人になられて居りますが、名曲アルバムを見るにつけ、あの軍国時代に、将来の生徒の教育の為に勇気と愛を持って自己の信念を曲げず教え通された立派な先生への永遠の御冥福を祈る者であります。



上山小三郎先生碑

藤花高女の入口左に建っていたが、講堂建設後不明であったが、荒木豊氏の教示により、大谷廟所納骨堂横に在ることがわかった。

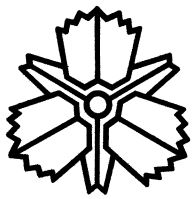
通学に思う

中野　徴
（一中五十二回卒）

四十年前の紅顔の一中健児、国防色（カーキ色）の制服に身をつつんでの通学時が懐しく思われる。二年生二学期の末頃には太平洋戦争に突入、戦果のニュースに緊張と興奮をおぼえたことである。その頃の昼食は、学年交代で、銃器庫傍の体育場の床板に正座して、桜章の入った特制の大型丼鉢に山盛りの素うどんを鼻の頭に汗しながら食べたものである。爾来、素うどんを大好物としているのは、自分だけではあるまい。

地黄煎の丘にくっきりと建った校舎はまだ新しく、したがって校内では冬でも素足であったように思う。戦時に入ると、靴にゲートル、新たに購入する学帽は戦斗帽に変っていった。

市内や郡部からの通学は、市電なら野町広小路、寺町三丁目、又は寺町終点から、石川線なら野町駅から、松金線なら有松から、それぞれ徒歩で二十分前後かかったのではなかろうか。新入当時の登校の二十分たるや、全力の強歩であった。上級生の速い歩度に慣れるまでは、傍目もふらずに息はずませて、小走りにくっ着いて行ったものである。しかし、下校となると全く逆で、悠々とした逍遙、散策といったものであった。聴きたての個性豊かな授業の口ぶりを真似し合ったり、読後の感慨を話し合ったり、咀嚼と思索と対話の散歩道であったことが懐しいのである。その道は砂利が敷かれてあったり、大小の水溜りが繋っていたり、藪をくぐり抜ける、竹の根のあらわにとび出している小径だったり、畑面が菜の花に、麦穂に、苺に、芋に、大根にと様変ってゆく丘を突切る黒土の農道だったり、春ならば舞う蝶にまとわれ、雲雀の歌声につつまれながら、夏ならば肥溜の臭いに息詰めて突走り、秋ならば裾に草の実をつけたり、草露に濡らしたりしての通学路であった。そして又、悪天候となっては、自然の猛威を避ける物蔭の少ない当時の地黄煎の丘の往還の酷しさは格別であった。けれども、皆もって桜章健児に浩然の気を養うように充分の環境だったことを、今さらに有難く思うのである。



泉の原旅情の歌

―パロディー―

徳久和夫
（泉丘三回卒）

尾山なる古城のみなみ
雲白く学子楽しむ
緑なすおばこは萌えて
クローバも滴むによしなし
くろがねにくすみし窓辺
陽に透けて鼻歌流る

あたゝかき弁当は無けれど
野に満つる香を吸えば
臭きのみ眼霞みて
顔の色はなはだ青し
マス・サボの群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば白亜も見えず
あな嬉し五時のサイレン
食欲のいざなうまゝに
星近きルーフにのぼりつ
焼いもの焦れる喰いて
空腹をしばし慰む

☆　☆　☆　☆

戦争もすでに末期に近かったが、予備役将校に米英鬼畜とハッパを掛けられ、リヤカーの戦車に体当りを敢行。子供心に可笑しさ半分、真面目半分の軍事教練（の真似事）だった。

『白亜』というにはいささかうす汚れていたが、『高窓』という古めかしい表現がピッタリだった。小学校を年代ものの木造校舎で過して来たピッカピカの中学生にとって、一面菜の花の金海に浮ぶ偉容は正に白亜の殿堂そのもので、一中生だけが持ち得た誇らしい存在であった。

中学一年の夏に終戦を迎え、デモクラシーの波が押し寄せて来たが、昨日まで敵国だったアメリカ合衆国に奇妙な親近感を抱いたのは、ホワイトハウスが白亜の殿堂と呼ばれることと無関係ではないと納得したことを憶えている。先生も生徒もみんな空腹で、それでも一生懸命生きていた。

一高における校舎の荒廃、それを和ませて余りある新生泉丘の誕生。高窓はさまざまな時代をただ黙って見つめて来た。

いま、その周辺は家屋がギッシリ建ち並び、往時のおもかげはもう無い。今度、取り壊して新たに五階建になるという。たとえ泉の原は人家で埋まっても、白亜の校舎はやはり『岩のごと』立ち続けて行くことだろう。

高校野球応援

水谷　昭
（泉丘七回卒）

先日二十数年ぶりに全国高校野球夏季大会石川県予選を見に行く。母校がシード校を破り近年になく勝ちすすんでいる。私も暇を見つけて後輩と二人で母校の応援に出かける。

石川県営野球場に入るのも久しぶり、ネット裏に近い母校応援席に座る。あたりを見わたすと大勢の人達の中に顔見知りの先輩後輩のなつかしい顔顔。私も童心に帰り応援する。前半は互角であったが中盤より後半に一点一点と追加点をあげ母校が優勢になってくる。次第に応援にも力が入り熱をおびてくる。母校の校歌、応援歌久しぶりに蛮声をあげる。廻りの応援の人達の顔も真剣そのもの、一丸となって母校の応援だ。相手校も敗けじと応援する。しかし我が陣営は応援人数も応援も断然優勢。うしろの方で「泉ヶ丘はこういうことになると一致団結する。数も多いが応援も素晴しい。今日まで毎日この野球場へ来ているが、一番素晴しい応援だ」との声がする。私は心の中で鼻高々である。いよいよ最終回になる。あと三人うちとれば勝利だ。一投一打に歓声がわき、その都度ラッパ、太鼓が打ちならされる。とうとう勝った。ついに勝った。ナインが我々応援団の前に並び感謝の挨拶をする。「ご苦労さん、よくやった、又明日頼むぞ」目頭に涙がたまる。大いに壮快であり、帰りの足どりも非常に軽い。

近況集（本多の森）を発行

金沢一中十三年会

金沢一中十三年会では本年度の総会を五月二十六日、神戸六甲山のホテル凌雲荘で開催することに決定したのを機会に、会員の「近況集、本多の森」を発行して全員に配ることになった。

これは昨年の名簿により住所の確実にわかった五十名に総会の案内状を郵送し、その中四十二通の返信のあったものを一書にまとめ岩田繁雄氏が発行されたものである。

「本多の森」は今年七十五歳を迎えた会員が遠い一中時代の思い出、過去、現在、未来の所感、人生訓などを綴り若き日の思い出集としたもの。

観光バス

谷口　肇
（泉丘十回卒）

「四キロや五キロ走るのにブツブツ言うな。走らされると思うから辛いんだよ。走るんだと思えば何んでも無いんだ。」という体育教師の声に我々25Hの面々はそれでもなお重い心を抱いて校門を後にした。昭和三十一年の秋であった。

この夏、京都・奈良へ家族旅行をした。私は最初どこか適当な所を二、三選んで一日づつのんびりする心算だったが、家内の主張で定期観光バスに乗る事になった。旗を持ったガイドの後をゾロゾロついて行く一団の姿は東京でもよく見かけるが自分がその一団に加わったのは確か大学受験に上京した二十余年前が最後である。そんな旅行は卒業したつもりでいたが、今度はからずもそのバスに乗る事になった。

京都と奈良の代表的な定食コースに一日づつ乗った。冷房中のバスのシートは最初なかなか快適であった。ガイドの説明も私には割合面白かった。これまで何度かこれらの土地を一人で旅行したが、今回観光バスが回った所は一度も訪ねた事が無かった。やっぱりこれが代表的な名所なんだな、とその事を確認するような思いで聞いていた。

然し観光バスがこんなに疲れるものだとは思わなかった。私も家族もコースの終り頃には残り少ないのを惜しむよりも早く終る事を期待するようになっていた。バスに乗ると先ず下車見物地点でバスへの集合時間に遅れた人はそのまま置いて出発すると釘をさされる。下車見物の度に集合時間を指定されるが、これが意外に余裕の無いスケジュールになっていて、駆け足でバスに戻るような事態が時々起きる。その為に疲れたのかも知れない。然しかつては地図を片手に終日歩き回っても疲労感よりはむしろ大きな充足感を持ったものである。肉体的にはこちらの方が遙かにハードスケジュールであった。

当然ながら観光バスは一度切符を買えば後は全く他人任せの旅である。指示通りに乗ったり降りたり、歩いたり停まったりする。ガイドの説明を聞きながら昔のマラソンの時の事を思い出していた。疲れるのは受身の旅行のせいでは無いかと。

それとも、素直に言うべきか。

「年だ」と。

ホテル雑感

本田吉昭
（泉丘十三回卒）

十数年前までは想像もできなかったが、現代はホテルの時代であるといっても過言ではないと思います。政治経済はホテルを舞台に動いているのではと錯覚をする位に使用され、結婚式、謝恩会、同窓会等利用目的は多様であります。短大生や婦人会のテーブルマナー、スティマナーでお話する機会も多くなり、ますます利用層が拡大しており、一般の生活の一部にまでホテルがとけこんでおります。ロビー、レストランの利用は自由で街角の一部として待ち合せあるいはお見合をされている光景もみかけます。ホテルの上手な利用方法はどうかというおたずねをよくされますが、それには「予約をされること」とお答えすることにしております。宿泊の際にたとえば新婚旅行の場合は記念品のプレゼント、夕食にはワインあるいはハネムーンカクテルのサービスとかホテルによって趣向をこらしております。

宿泊、レストラン、宴会それぞれに利用目的を明示していただきますと、それぞれに応じたノウハウをホテルは持っております。ホテルのノウハウはたいがいは無料ですので最大限に利用することも上手な利用法といえます。初めての土地で宿泊する場合のホテルの選び方は「その土地の一番いいホテルの一番安い部屋に泊る」昔からいわれている頭のいい泊り方の筆頭です。商談に信用が伴い、取引先の信用が増す。泊まっている部屋が高かろうが安かろうがホテルのサービス機能は同じように使えます。

上手にホテルを利用していただくことが、ホテルのコミュニティ機能を高めることになります。

ホテルに勤務する者にとって最大の喜びは「よかったよ」のひと言をいただくことです。朝が早く夜の遅い勤務もあまり苦でないのも、お客様とホテルマンという垣根を越えた人との出会い、ささやかな心のふれあいに幸せを感ずる為ではないかと思います。

金沢泉丘高校 同窓会（第13期 昭和36年卒）　昭和58年8月13日

応援団悪行記

広瀬靖久
（泉丘十六回卒）

高校生時代を顧みると、本当にろくでも無い事ばかりやっていたものだと思います。

私は応援団リーダーをしていましたが、私の三年時、昭和38年当時は卯辰山の相撲大会では水本君（現能上君）が個人優勝し、野球部は県代表として夏の甲子園大会へ出場する等、運動部の活躍華やかなりし頃でした。運動部が強いと又、応援団の方も何かと……いわゆる巾をきかせたもので……。もう時効だと思いますので公表しますが、当時応援団の悪童連はよくコンパを開いて飲んでいたものです。その結果いろいろと事件も起こしました。

相撲大会終了後、卯辰山某所で祝勝会を開いた折、全員飲み過ぎて歩けない者も出たので、ちょうど山へ登って来た小型バスに乗せてもらおうと止めてみると、何とそれが市の補導車で全員が補導されてしまいました。幸い学校には寛大な処置で済ましていただきましたが、これ位でこりていては応援団は勤まらないとばかり、それ以後も野球の祝勝会、運動会打上げ会、忘・新年会等とコンパを重ねておりました。卒業も間近になった二月、最後だと言うことで、某公民館にてコンパを開いたのですが……その時に公民館の人と事件を起こしてしまったのです。まずい事にいつもの通り私が幹事をしており、大学生として自分の名前と住所で会を申し込んでいたため、自宅に連絡が行き、激怒した父が学校に通報したため学校内部だけの問題では納まらなくなり、ついに応援団全員の処分にまで発展してしまいました。何とか卒業はさせていただきましたが、今から考えると、よくまあ悪いことばかりやって来たものだと思います。しかし、この悪童連は何でも打ち開け相談できる心からの親友として今でも親しく付合っており、又、高校時代からの幹事の経験が大学、又社会に出てからでも何かと役に立っている様で、今だに色々と同窓会の幹事役を引受けているような次第です。又、近々同窓会を開いて、これら悪友達をはじめ多くのなつかしい顔と再会したいものと楽しみに計画している所です。

（金沢デザイン専門学校々長）

桃・栗三年柿八年

坂口　敏
（通信九回卒）

桃栗三年柿八年という諺がありますが、桃栗のように三年で高校を卒業するはずのところ私は柿と同じく八年を費して漸く高校を卒業できました。高校生活を八年も味わえることも通信制という有難い余得でしょうか。八年も在籍できる自由さはありますが、反面リポートの一齣一齣を自分の手で埋めなければ一歩の前進も望めない。つまりやる気を出さなければ永久に卒業に近づかぬ厳しさもあります。入学当初は卒業を考えず、好きな国語だけをじっくりと進めていましたが、娘が大きくなるにつれてせめて娘より先に高校を卒業しなければならぬ羽目に追いやられて後半になって慌てて勉強し始めたのも今になって見れば懐しい思い出である。

学窓生活が長いとお世話になった先生方も多く、父娘共に教わった先生も何人かおいでになり、父親面して威張っていても勉強はからっきしで、娘の足元にも及ばぬと思っていらっしゃるかと思うと恥しいが、父娘で同窓生というのもまた楽しいものである。

杉本芳野先生が伊東へ転居なさる折、わざわざ尋ねて下さって、鳴鶴、一六、頼山陽の千字文を頂きました。「私が持っていても役に立ちません、どうぞ役に立てて下さい。」先生のこの一言がその後の私にとってどんなに励みになったことか。毎年、年賀状をさし上げていたのですが、今年はどうしたことかお返事を頂けず、気にしていたところ、先生のお嬢さんから、先生がすでに黄泉の国に旅立たれていたことを知り愕然としました。上手になったら先生に一枚見て頂こうと心に期していたのにその望みが断たれ、遺品となった千字文を見て悲しみに堪えず、ご冥福を祈っています。

金沢の女（ひと）

作詞　作曲　野本正作（在東京）
泉六回卒

一、森の都もつめたく濡れて　かすむ城趾（しろあと）金沢しぐれ
一人（ひとり）たゝずむ兼六園の　昔を語る静けさ悲し
あゝ君いずこ　金沢の女（ひと）

二、勘忍してたい別れる私　涙で残した金沢なまり
つくしてくれたあの優（やさ）しさが　忘れられずにこゝまで来たよ
あゝ君いとし　金沢の女（ひと）

三、たずねる露路（ろじ）に琴の音（ね）洩れて　行けど影なき幾曲（いくまが）り
愛しているとたゞ一言（ひとこと）を　伝えておくれ街の灯（ひ）よ
あゝ君恋し　金沢の女（ひと）

卒業以来二十数年、遠く故郷を離れて東京に住まい、仲々に金沢に帰る機会がありません。

金沢に生れて金沢に育ち、金沢は私にとって忘れることの出来ない想いでの街です。

素人の遊びにすぎませんが、遠い故郷を懐かしさのあまり時々詩にしてうたって居ります。

本部・支部だより

一泉同窓会東海支部便り

景気は個人消費が少しは上昇しているものの、本格的な回復はまだまだで、伸び悩んでいますが、求人は極めて積極的で、産業界も将来にむけて人材の確保のため、活潑な動きを示しております今日この頃ですが、一泉会の皆々様には其の後如何お過しですか、お伺い致します。

東海支部は其の後、格別の動きはありませんが、五月十六日(土)幹事会を開催し、今迄大変お骨折り頂いておりました会長の前田秀之さんが名誉会長に、新しく湯谷外喜男さんに新会長になって頂き、また現役員は全部留任、新しく若手の会員の中から幹事を大幅に増員し、若返りをはかると同時に、より積極的な活動を開始するよう申し合せました。来る九月二十七日(日)十一時三十分より十五時まで、王山会館で第九回の総会ならびに懇親会を開くよう打合せを致しました。

事務局としては、同じ学び舎で過した絆を更に強く、お互のために役立てるべく努力致しておりますので、今後共よろしくお願い致します。

同窓の集い

金沢一中三十二期生全国大会

本年度の標記大会は、昭和五十六年五月十三日に、和倉温泉加賀屋に於て開催された。集った者は左記の二十八名であった。前年熱海起雲閣で集って以来、丁度一年目の再会にお互の健勝を祝って、大いに飲み大いに語って旧交を温めた。

関東地区＝赤井直恭、泉谷弥一、北村道四郎、下村節義、相馬克己、中村一郎、松林幸雄。

東海・近畿地区＝越後一雄、田辺太郎。

北陸地区＝浅香勇吉、石田国太郎、大島勝比古、大島勇政、太田真一、可長乙吉、清水　弘、新谷桂三、橘　倫、富沢友治、福田久太郎、正木外雄、松本　弘、又野政次、松井清忠、水本庄太郎、同夫人、吉田直茂

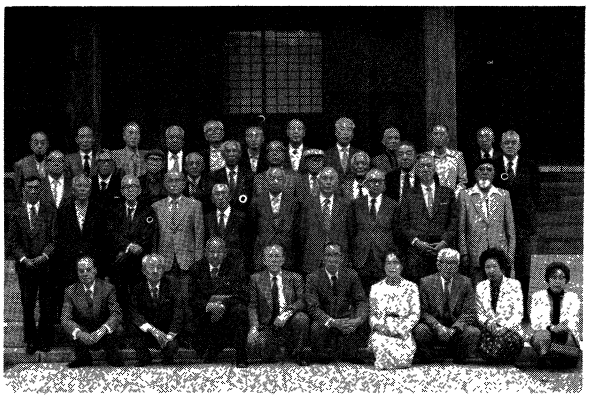
翌朝八時朝食を摂りながら、今後の運営に付て意見を交換し、来年度も全国大会を六月上旬の土、日曜に関西で開くこととし、詳細は地元の竹田喜久三、田辺太郎の両君に任せ、関東及北陸の幹事は協力して盛会を期することに決し散会した。

なお有志十二名は帰途羽咋にて下車、タクシーを連ねて気多に趣き、折口信夫、春洋氏の墓前に供花し、硫黄島で散華した級友、国学院大学教授の歌人、折口（藤井）春洋君の冥福を祈った。次で気多神社に詣で、折口父子の歌碑に佇んで遠き昔を想い級友を偲んだ。（吉田記）

◇金沢一中三々会大会

一中三々会は昭和四十九年以来、毎年各地で大会を開催し、旧交を温めてきたが、この間、数年であるが毎回元気な姿を見せていた人も既に幾人かが不帰の客となった。今年は一中入学以来六十年を迎える記念大会とし同級、物故会員の追悼法要を併せ行う全国大会とした。

五月十五日、金沢の専光寺に於て、この法事を営み、終了後、出席者四十名全員バスにて和倉温泉に向い、途中、完成間近かの能登大橋を横に眺め会場の寿苑に到着する。



午後六時より総会に移り、幹事の編集による会員の近況報告集を各自に配布し、互の健康を祝し懇親会にうつる。翌十六日は夫々自由行動とし、これを機会に能登半島に旅立つ者等あって解散する。（藤田記）

「初秋白山」
竹沢　基（一中40回）

各期同窓会開催の際には

近時、各卒業期ごとに催す同窓会が各地で行われております。又職場を中心とした一泉会も最近目立って増えてきました。これ等同窓会の様子は是非、当本部宛にお知らせ下さい。

本誌に掲載し、広く皆様に報道したいと思います。皆様との団結がいよいよ一泉同窓会の結束をかため、今後の発展に期待できるものと考えます。

是非ご一報下さることをお願いします。

犀川の水は　逆さに流れる？
――三五会総会

ことしの三五会（昭和三年卒、三五期生）は毎年一回の総会を六月二十七日、金沢市柿木畠の「芝生」で開いた。

会場を決めるにあたり、世話人数名が寄って出席者の数を予想してみたが、病気や病没などでおそらく昨年を相当下まわるから、あまり広い会場より小じんまりとした、然も昔なつかしいあたりがよいだろうと考え選定した。

ところが当日を迎えて驚いた。集まった連中なんと三四名の多数――東京から三名、富山県からは高岡・福光と各一名、ほかに知多、呉、宝塚、県内各地からとわざわざ出かけてくる熱心さ。

カクシャクの鏑木、宮沢の両先生をかこんで狭い会場は熱気ムンムン。

卒業以来、数十回と開いてきた総会だが、出席率が年とともに高まってくるのはどんなわけだろうか。

鴨川の水は逆さに流れても……じゃないが、犀川の水も一泉同窓会各期のために逆さに流れるのじゃないだろうか。

石浦神社前の餅屋のエンド餅のうまさを話し、朝の授業二時間目からコッソリ弁当をひろげた話など盡きぬ思い出を語り合った。

当日の出席者つぎのとおり（順不同）

金岩　明　牛塚　藤雄
安江　四郎　篠原　毅
小坂　音次　笠野外喜夫
市島亀太郎　板垣吉兵衛
大浦喜三郎　内田　暁太
桜井　喜文　松村　博
宮村　清一　桜井　進
松島　譲　高橋　外雄
作本　秀雄　越田喜久治
結城　与久　安間　孝正
南部　貞一　梶本　国男
福岡　志良　浅地　忠
新　広太郎　大滝　武雄
五宝　良吉　小林　敏雄
松井　順孝　浅野不二男
清水　健二　広瀬　清浩
杉野　啓　大森　玄衆

（大森記）

「友　遠方より来る」
38回同窓会ひらく

「友、遠方より来る豈楽しからんや」大正十五年一年生の時、漢文の藤井先生から教えられた。

当時、佐々木一哲君は組長をつとめ円満な人格者だった。昭和六年卒業以来絶えて消息がなかったが近年ブラジルに在住していることが判り、二年前位から文通が始まった。二月頃、五十年振りに夫婦で祖国訪問をするので、その際必ず金沢へ行くとの便りがあった。

六月突然市内電話で三日間の予定で金沢滞在と連絡があった。何分時間的余裕もないこととて、頭に浮かんだ同窓生に電話連絡をして急ぐ集ることとした。「オウ珍らしい」と一言で応じてくれた面々十四名、犀川桜橋詰「とよしま」で歓迎同窓会を開いた。

卒業後二年間、東京で準備と語学や知識を得る為に学校に通い、単身渡伯し、営々と働き八人の娘をそれぞれ大学を卒業させ結婚させ、漸く肩の荷を卸し、夫婦で故国の土を踏んだという。

往時のふくよかな格好は消え、田舎の老いた爺さんを思わせたが飲む中、話す中に昔を想い出した。世界の大河アマゾンを始め、現住地のベレン市の話は盡きない。珍しいアマゾンに住む大魚のウロコ、コーヒーの原種、香料等の土産品を前に今浦島の如き佐々木君の咄々とした話に魅入られる。

今ブラジルではアルコールで車が走り、ガソリン代用にアルコールの製造が盛んな由、一寸奇異な感じを受けた。

学校時代、中肉、中背、童顔丸顔の彼が軍事教練で颯爽と少隊長をやっていた当時の姿が偲ばれ、今や人生の大役をおえ、ブラジルの田舎町で大勢の孫に囲まれ、静かに余生を送る姿を想い、心から倖せを祈らずには居られない。

（加藤記）

当日、集った同窓生

伊藤　正保　内田　隆元
江戸　重富　大川　兼夫
加藤　俊男　黒田　一郎
小坂外喜次　松田　衛
松本　猛　村中　博明
山田栄喜知　西多外喜次

七桜会50周年全国大会

朝方まで降っていた雨も私達の金沢一中七桜会の卒業五十周年全国大会を迎えるように晴れてきた。時恰も金沢市祭（百万石祭）の日、六月十三日午後三時本多ヶ森に集合ということになっている。「金沢一中応援旗のもとに集れ」二時半にもう全員三十四名集合完了。宮沢先生がおいでになった。イヤー若々しい先生のお姿に万雷の拍手、交々握手づめだ。五十年ぶりのかたいかたいスキンシップだ。

本多ヶ森をそぞろに散策、この付近が校門、教官室、道場はこの辺だ、残っている三本の栂と松の木、裏門はここだった……。

想い出を残しつつバスに乗り一路後輩の屯する泉ヶ丘高校へ……久田校長の銅像に額づき、いよいよ厳霜碑の前へ……亡き学友七十余名の氏名を呼びながら花束を捧げ心から冥福を祈った。ジーンと何だか胸にこみ上げてきた。

泉ヶ丘原頭に別れ百万石祭りで賑う金沢市中を眺め、バスの中は五十年前の若かりし頃の話に花が咲き忽ちのうちに卯辰山頂上に到着した。準備してあった「円八のあんころ」を開いて熱い番茶で喉を潤おす。懐かしい「円八のあんころ」の味、みんなおいしそうに食べている。宮沢先生も眼を細めてみんなと語り合って居られた。

四時半今晩の会場へ移動だ。五時金沢の奥座敷湯涌温泉あたらしや旅館に到着した。「歓迎金沢一中七桜会」の看板に迎えられ、先発隊の準備で各々部屋に入る。早速旅の汗をながし、六時一中校旗をバックに記念撮影、元気に集ってきた五十年前の若鳥も今や白髪、いやいやまだ若い黒髪もいる。みんな感激の面影である。あの厳霜碑の前で撮した卒業写真の頃が想い出された。

六時半より懇親会だ。波乱に満ちた時代を過ごし、風雪に堪えてきた私達、今相見ることの出来た喜びが一杯だ。然しこの席に出席出来ない今は亡き学友。又、病床にある友に想いを走らせ同期生名簿を眺めながら更めて感慨にふける。そして本多ヶ森のあのオンボロ校舎、雨もりの天井、破れたガラス窓、石段の二列の擦り凹み、……それからトッカピン、辻あん、イナシア、チョイトコ、デモ、ムジナ、バカ中、ガンマ、ダルマ、パンジュ、ホッテン、不景気、いぼ二、気違い、ずべちん、ポンプ、がま、神経、ケバ、どんま、小豆……当時を回顧すると多くの感傷的なことが走馬燈の如く浮んでくる。そして若さを取戻したような今日の感激をもってこの五十周年を人生の一ふしとし更に新しい余生の再出発だと元気づけ閻魔さんがお迎えに来ても「まだ早い」とお断りしようと誓い合った。

宮沢先生は昭和二年はじめて一中に着任されたのだ。丁度その年に我々が桜章校に入学したご縁がある。先生のご挨拶もしみじみと当時を偲ばれたようだ。いよいよ宴会だ。想い出話も料理の一つ。宴酣になって嘗てハーモニカバンドのキャプテンのハーモニカ演奏。宮沢先生の八十才を寿ぐ小唄の白扇、鞍馬天狗の強者の交わり……。波浮の港、君恋し、影を慕いて等々往時の流行歌まで、そしていよいよ金沢一中校歌、応援歌と夜の更けるのも覚えず……最後は一斉に立ち上がり先生と共に肩を組み合い「螢の光」「星影のワルツ」で遂にクライマックス、感激の眼そして涙。

大広間は十時すんでも去り難く話し続ける顔と顔。部屋に戻るも寝つかれず、夜は更にふけてゆく。

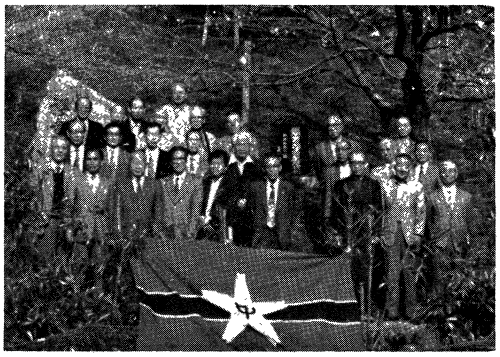
翌十四日八時朝食。まだまだ話はつきないが一同の幸せと健在を念じ乍ら出発、江戸村見学して十一時すぎ小立野から金沢市内に入る。いよいよお別れだ。交々堅い堅い握手…再会を期して記念品の加賀人形を手にして家路についた。

七桜会健児に幸多かれと祈念して乱筆を止める。

（七桜会幹事　山瀬記）

旧一中、上の運動場での観桜会
昭和九年卒四一期生会

四十七年四月の全国大会で旧一中、上の運動場（現本多公園）土堤に植樹した三本の桜の下、四一期記念碑



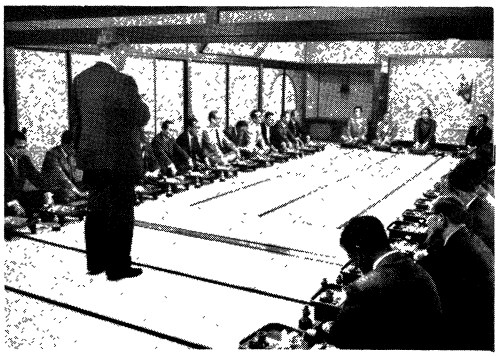
（金田心象先生筆の『われわれの縁爰に始まる』の文字が刻まれている）

前で、記録的な豪雪から開放され、春の息吹きを味う、金沢地区同期生観桜会を開いた。懐旧の情一入濃い場所のこととて珍しい顔ぶれも集まり、（三十一名）飲む程に食べる程に、時の経つのを忘れて懐旧談に、時事放談に花が咲いた。（牧沢記）

桜誓会（一中45回）新緑集会

五月二十三日夕六時から金沢市寺町の「つば甚」で新緑集会を開いた。

昭和53年に卒業40周年の集いを金沢市湯涌の白雲楼で各地から多くの諸兄を迎えて盛大に開いてよりすでに三年、本年は永年待望していた刀匠隅谷正峯君が重要無形文化財保持者（人間国宝）の認定をうけられたのでそのお祝いを兼ね、お互い還暦を迎え――すでに過ぎたものもいる――年齢を吹っとばそうということで集会を開いたが32名が参加、函館から松井輝雄君も初参加した。



まず物故者（前回の会合のあと北村泰一君、高森正章君、服部成＝旧名貞雄＝君、吉田文夫君が亡くなられた）に黙禱を捧げ、次いで隅谷君の人間国宝認定を賛えて荒川宏君より記念品を贈り乾盃、隅谷君の挨拶のあと懇親会に入り思い出話に時間の過ぎるのも忘れ、最後に校歌、応援歌を合唱して八時過ぎ散会した。

なお前回会合で決定し作製に入っていた「思い出の写真集」（一万円）が八月末頃出版の予定、希望者は桜誓会までご連絡を乞う。（堀口記）

金沢一中四六期
「アンビシャス・ボーイ連の還暦」文集完成

「卒業四〇周年記念」に何かを残したい。植樹にするか。石碑をたてるか。いろんな意見続出のあとに二年前ともかくきまったのが「記念文集」の発行。

ところが、いざ原稿募集の段となると、普段、口は達者、顎のこわいオヂン連中も筆サッパリ進まず。社長や院長先生でもこれだけはワケにイキミシンという具合で、書くほうも、編集するほうも、まさに悪戦苦闘。

当初は五〇編の原稿が集まれば上出来と思っていたのに、二年間の努力の甲斐あって、締切りには生存者一三五名中八〇名の執筆投稿を得、大成功をおさめたと思っている。

これは編集を一手に引受けた村井又兵衛君の人徳と、クラスメート各位の団結ファイトが、この好成績を生んだ原因でなかろうか。

まさに還暦を迎えてもアンビシャスボーイは若き頃そのままのアンビシャスボーイであった。

五月二十八日金沢國際ホテル（内田一君社主）で編集会議を開き題名「厳霜烈日」副題に「アンビシャスボーイ連の還暦」と銘打ち村井君のところで編集製本のラストスパートに突入した。

さて、どんな本となって発刊されるか。

46期は10月23日金沢國際ホテルで56年度クラス会を開催するが、この席上で上梓された40周年記念文集を出席者全員に手渡す予定である。（太田記）

文集編集の打合せ会

◇泉丘3期生
卒業30周年記念全国大会
盛大に開催さる

泉丘3期生（昭和26年卒）は本年予定の第10回学年会がちょうど卒後30周年にあたるところから、かねてより全国規模の準備をしていたが、去る8月8日山代温泉「ホテル百万石」において、その卒業30周年記念全国大会が盛大に開催された。

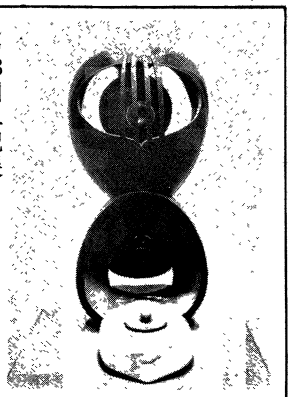
すでに前日より金沢入りした期友も多く、片町の某所並に某々所を貸し切っての前夜祭は地元・遠来を合せて60名が参加、まずはにぎやかな開幕となった。

明けて8日は午後1時より、大乗寺本堂において、今は亡き恩師4名、同期生16名を慰霊する追悼法要が執行され、読経流れる中を遺族、期友61名が次ぎ次ぎと焼香、静かに冥福を祈った。一行は山代へ移動の途次、新築工事中の母校を訪問、無残や半壊となった校舎に往時を偲び、あわただしく最後の別れを惜んだ。ために前庭に待ちわびた20周年記念樹の『もっこく』に挨拶するのを忘れた。

6時かっきり、「ホテル百万石」は「唐松の間」において、山本外吉先生ほか9名の恩師を迎え、総勢139名よりなる30周年記念大会並に懇親会が開始された。席上、記念事業の報告がなされ、文集名「泉三」をもって学年会の愛称とすることが万場一致で決定。あとは次ぎ次ぎ登場する「おもいでスピーチ」を聞く余裕もあらばこそ。30年前の悪童・美姫は移動教室そのままに、話・話・話のスクランブル。タイムカプセルに乗り損ねて識別不明のまま終ったヒトも居たかも。羽織・袴の応援団長が現われて「香雲」「征旗は風に」「南征の調べ」と大合唱。「追憶」のメロディが「琵琶湖周航歌」とごっちゃになったところで万歳三唱。そのあと「百万石」名物「お祭り広場」へと繰り出した。

（暗　転）

翌朝は胸一杯の感激を最高のお土産に、再会を約して散会した。かくして「泉三会」真夏のフィーバーの幕は閉じた。



第33回二紀展
「天狗とおかめちゃん」
堀　義　雄
（一中42回卒）

第五回
桜美会・小品展

絵の同窓会として既に金沢で有名となりました私共一泉桜美会は、定例の本展の他に有志が小品展を催すこと、ここに五回目を数えました。

会場風景・宮沢外与治先生（八十才）

梅雨もあけ、土用の暑気払いとして七月三十日から八月四日迄、金沢市片町の北陸電力金沢ＳＳに於て桜美会第五回小品展を開催致しました。

主要出品者は、竹沢基金沢美大名誉教授はじめ一陽会審査員中村秀雄、一陽会新進彫刻家として躍進目覚ましい今英男、本業の酒屋より、今年のＮＨＫテレビ小説「風の盆」の題字を揮毫された著名篆刻家　坂野雄一、大樋焼の大樋長、津田式水引人形師津田梅、二科で精力的にやっている医師団、粟野利雄、石野竜山、石田直行、横井衛の各氏、写真の本多政一、英勝雄、池田和夫、書では山川孝、中田富子、その他話題にことかかない作者及作品が多く、全部で二十九名が出品し、来場者六百余名を数えました。

（斉藤記）

❀　❀　❀　❀　❀　❀

◎泉二回卒業生では昨年の三十周年記念に引き続き、今年も八月十三日、金沢センチュリーホテルにて開催した。

◎泉十三回生大会が八月十三日、金沢ニューグランドホテルに於て催された。

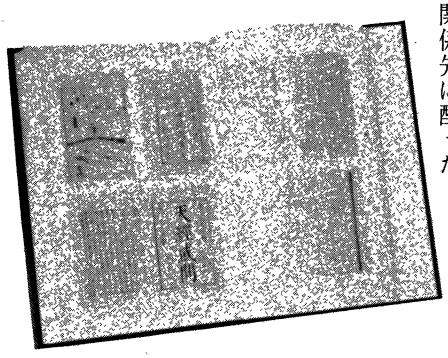
◎泉十四回生全国大会が去る八月十五日、金沢國際ホテルを会場として催された。約一二〇名の会員が東京、大阪方面より馳せ参じ盛況裡におわった。

◎泉十五回生の同窓会が八月十五日、会場を金沢國際ホテルとして開催された。

同窓会通信

「金沢泉丘高等学校蔵善本解題目録」の出版なる

今般母校泉丘高校では旧金沢一中、加賀藩学校・明倫堂以来、連綿として学校に伝わる和漢蔵書や明治初期の洋書千百七十七点を「金沢泉丘高等学校蔵善本解題目録」としてまとめ出版し、県内の各学校や図書館など関係先に配った。



同目録の内容は「序説」「蔵書印譜」「貴重本解題」「善本解題」の四部に分けられ、巻頭には貴重な蔵書の写真十九頁が掲載されている。国内には一冊しかない幕末の数学者戸倉伊八郎の「航海啓微」加賀藩が幕府に献納した「加賀藩版 欽定四経」、金石の天才・大野弁吉の「応象寛歴書」日本最古の英語辞典とされる「ウエブスター英語辞典」など、貴重な蔵書に逐一解題が付けられている。母校図書館には徳川中期に創設された藩学校・明倫堂に所蔵されていたものを中心に九千二百冊の和漢書がある。この編集には郷土史家の旧一中出身の山森専吉氏（大正十五年卒）があたり、母校教諭の協力で三年間を費やして刊行された。

夏の高校野球石川大会 泉丘校準決勝に敗る

今年もまた青春のドラマを炎天下のグラウンドに繰りひろげ第六十三回全国高校野球大会石川県予選が、五十校の参加の下で開かれた。

かつては北陸地区代表として甲子園球場に駒をすすめたことのある母校では、その後、進学校につきまとうひ弱なイメージの為か、久しくその姿を表にあらわす機会がなかった。

それがこんどベスト8入りした泉丘、二水、小松を始め第三回戦にまで進出した金大附属高校の健闘に、これまでのイメージが一変した。とくに母校泉丘は準決勝戦に出場し、県工に惜しくも2—1で敗れることになった。

学校では最近、部活動に力を入れ、勉強と両立出来るムードが盛り上っている。スポーツは何ものにも代えがたい活力を学校内にもたらした。

母校の今後の健闘を祈る。

同窓先輩よりの著書寄贈つづく

今春より引きつづき、先輩会員よりの著書の寄贈が同窓会本部にとどき、そのご厚意に深く感謝している。

この貴重な本は将来、同窓会文庫を設けて、ひろく同窓、後輩に公開し、その時に備えることとしたい。

寄贈をいただいた方々は次の通り。

○川北　篤氏（昭和二十三年卒）
　川北病院六十年の歩み
○稲本龍助氏（明治四十四年卒）
　清　交（清交社発行）
○大沢　衛氏（大正十一年卒）
　すいかづら
○茶谷健一氏
　父保三郎の白寿に寄せて（明治三十三年卒）
○平石英雄氏（昭和九年卒）
　ふじとみ子童話集（空をとぶ毛がに）
○中川政義氏（昭和十五年卒）
　随想集　追憶
○中堂観恵氏（大正三年卒）
　埼玉稲荷山古墳
○NHK金沢放送局
　NHK金沢放送局「五十年のあゆみ」

同窓会本部へのご協力

同窓会活動への協力金として左記の方々から夫々ご寄附をいただきました。茲に厚くお礼を申し上げます。

辻　繁雄氏（大正五年卒）
上野　善信氏（大正四年卒）
関西八泉会　（昭和三十一年卒）
中野　達雄氏（昭和二十年卒）
一泉懇話会
岩田　繁雄氏（大正十三年卒）

卒業第一回〜第二十五回迄の調査について

前回昭和五十三年の名簿作成の時は調査期間が短く、杜撰な名簿になった事をお詫びします。

これ迄の名簿は確かな調査が少く、どちらかと云えば前号の単なる書き写しただけの所が多く、五十三年以降の追跡調査の結果、現実には通用しない点のある住所や職業欄である事が判り、名簿価値が充分でないと思いました。これではという事で、以後現在もつづけている一人一人の綿密な追跡調査に取りかかりました。その結果をまとめたのが別掲の表であります。

五十三年当時とは比較にならない位の資料を発掘する事が出来ましたが、之は各方面の方々のご協力の結

果です。ここに深くお礼を申上げますと共に、今後も絶えず続けたいと思っておりますので一層のご力添をお願いします。

表について特に二、三の事を申上げたく左に列記します。

一、第一回～第七回の卒業生は全員逝去されております。最近まで健在であり一泉同窓会の中の最高齢者であり、七回までの唯一の生存者でありました茶谷保三郎氏が二月十七日に満九十九才で逝去されました。

二、第八回、第十三回には残念乍ら健在を確認される方が一人もおられません。

三、第十二回、第二十五回には不詳者が一人もなく、一泉の全史を通じてこの点珍らしいケースで、この外にはずっと後年の昭和九年の第四十一期があるだけです。

特に第二十五回の把握は同期の米沢喜六氏（金沢在住）のご努力の賜だと思います。

四、第二十期は、今も継続的に同期の方々が集って同期生会を開いておられる最も古い期ですが、その中心となって同期を把握しておられるのが東京在住の谷　恵吉郎氏です。この期の不詳者は一名だけで、その追跡調査は事務局でもお手伝いしていますが、まだ手がかりがつかめません。

五、健在を確認しています一三三人の内金沢市在住は四〇人、石川県内には外に十一人おられます。

数え年81才以上の卒業生の調査

（56.8.31現在）

卒業年次	卒業回数	数え年（多分）（才）	53年10月の名簿上の現存者総数	左の内現在健在を確認した人数	53年10月以後の調査で逝去の判った人数	差引現在不詳者数	摘要
明治							
27	1	105					全員逝去
28	2	104					
29	3	103					
30	4	102					
31	5	101	3		3		
32	6	100	12		12		
33	7	99	11		11		
34	8	98	24		17	7	
35	9	97	17	1	12	4	
36	10	96	27	1	17	9	
37	11	95	29	1	18	10	
38	12	94	29	1	28		不詳者無
39	13	93	24		17	7	
40	14	92	37	2	23	12	
41	15	91	38	5	26	7	
42	16	90	43	2	27	14	
43	17	89	39	10	20	9	
44	18	88	51	18	24	9	
45	19	87	54	10	31	13	
大正							
2	20	86	26	10	15	1	
3	21	85	41	12	23	6	
4	22	84	35	16	15	4	
5	23	83	33	8	11	14	
6	24	82	30	10	10	10	
7	25	81	59	26	33		不詳者無
合計			662	133	393	136	

隅谷正峯氏の栄誉たたえ
人間国宝祝賀会

全国でも数少ない気鋭の刀匠、隅谷正峯氏（昭和十三年卒）の重要無形文化財日本刀技術保持者認定祝賀会が、中西県知事ら県内各界の有志及びご当人の母校、立命館大学、金沢一中同窓会が発起人となって六月二日、金沢ニューグランドホテルで開かれた。席上それぞれ立って隅谷氏の栄誉をたたえると共に今後の一層の活躍を祈った。

隅谷氏は、鎌倉中期の刀匠、備前長船の研究作風の第一人者で、新作名刀展などで優れた作品を発表、正宗賞など多くの賞を受賞している。

祝賀会は一〇〇名余の人々が集りそれぞれ隅谷氏に祝辞をのべ盛況裡に終った。

「さよなら金沢一中・泉丘旧校舎」の写真を販売中

今春発行の「一泉」第三号誌上、及び各期常任委員の方々にご連絡致しました泉丘旧校舎の航空写真は、かつて同校舎に学んだ人々に非常な人気を博しました。引き続き販売をしておりますので本部までお申し込み下さい。

定価一部（四枚入）一、〇〇〇円（一部のみ入用の方は送料共一、一〇〇円）

郵便貯金振替　金沢〇―4254番

あとがき

春・秋と年二回、同窓会の機関誌として発行を計画して、こんど第四号の印刷が完了しました。内容については不備の点が多々あることと思い、一泉編集委員会をもうけ数名の方にお集りをいただき、本誌発行についてのご意見等を協議致しました。

この冊子で母校の近況や同窓の動きをお報せすることによって皆様との交流が更に活潑になることを目的として居るものであり、今後ますます皆様よりのお気付の点をお聞かせいただくと共に、自由なご寄稿をお願い申し上げます。

（事務局　西多記）